

# 日本人学生と留学生の交流における認知のずれに関する研究

## Cognitive Gaps in the Interactions between Japanese University Students and International Students

山口 雄介<sup>\*</sup>      小林 里華<sup>\*\*</sup>  
Yusuke Yamaguchi<sup>\*</sup>      Rika Kobayashi<sup>\*\*</sup>

### 要旨：

本研究は、日本人学生と留学生の交流における認知のずれを検討することを目的とした。質問紙調査の結果から、①日本人学生の「異文化の受け入れられなさ」や「個人の要因による回避」が留学生との交流を阻害していること、②留学生は日本語能力不足による困難さを感じているが、日本人学生は自身の語学力不足をさほど問題視していないこと、③交流を通じたポジティブな経験や交流意欲があれば、相互交流が促進される可能性があること、④不寛容な事態は、相手集団の生活事情や文化差への理解不足や少数の事実を過度に一般化していることに起因する可能性があること、⑤まずは不寛容な事態に対する認知と対処方略の違いを知る必要性があること、の5点が示唆された。結論として、日本人学生と留学生との友好的関係を構築するためには、互いの言動の背景について学び合うことで認知のずれを小さくし、歩み寄る努力が必要だと考えられる。

キーワード：留学生、日本人学生、交流、認知のずれ

## I 問題と目的

### 1. 外国人留学生の増加に伴いキャンパスに生じる心理的問題

近年、わが国では、ベトナムとネパールからの留学生数が増加傾向を示している。文部科学省の「外国人留学生在籍状況調査」（文部科学省ホームページ、2020）によると、2019年5月1日現在の外国人留学生の内、ベトナム人は73,389人（対前年比1,035人増）、ネパール人は26,308人（対前年比1,977人増）であり、中国人に次いで多かった。ベトナム人留学生とネパール人留学生が増加した背景としては、2008年9月のリーマンショックと2011年3月の東日本大震災の影響により、中国人人口が停滞傾向を示し、日本語学校や技能実習生を受け入れる団体・企業が中国に変わる新たな人材の供給源を求めようになったためと言われている（山下、2016）。日本語学校の留学生は1年半ないしは2年の日本語能力習得に努めた後で専修学校や大学に進学するケースが多く、留学生が少子化によって学生確保に苦勞する高等教育機関の学生数減少を補っていると指摘されている（岩切、2017）。そのような社会的背景により、わが国の大学において、キャンパスの多様性が拡大していると考えられる。キャンパスの多様性の拡大は、国際交流の機会の増加といった好ましい影響がある。しかし、適切な介入が不在なまま多数派と少数派との接触機会のみが増加した場合には、多

<sup>\*</sup>日本経済大学経済学部経済学科

<sup>\*\*</sup>特定非営利活動法人九州大学こころとそだちの相談室

多様性に対する抵抗感、集団間の緊張や敵意等が強まるという否定的な影響が指摘されている (Datum, 1992; Pope et al., 2014)。また、多様性に対する抵抗感から、多数派の個人が偏見・差別・ハラスメント、排除、回避、距離を取ることで、他者が行う差別やハラスメントの黙認を行うとされている (Thomas & Plaut, 2008)。大西 (2016) は、留学生の増加によりキャンパスに生じうる混乱への対処等に関する日本国内における議論の不十分さに言及し、多数派への働きかけの必要性や、多数派側の視点を明らかにした研究の必要性を指摘している。以上を踏まえると、キャンパス内の多数派 (日本人学生) と少数派 (留学生) の双方の視点を理解し、多様性に対する抵抗感と集団間の緊張や敵意の軽減を試み、双方の間に友好的関係を構築していく必要があると考えられる。

## 2. 日本人学生と留学生の交流に関する先行研究

日本人学生と留学生の交流に関しては、留学生が日本人と友人関係を持ちたいと願うにも関わらず、日本人の友達ができにくく、ホストとゲストの相互交流が思うように進んでいないことがしばしば指摘されている (坪井, 1991; 田中, 1995; 栖原, 1996; 花見, 2003)。心理学の領域では、日本人学生と留学生の対人関係形成の阻害要因についての検討が行われている。留学生を対象とする先行研究では、相互の無関心、日本語力不足、留学生のバイトの忙しさ、話題が合わない、留学生同士の方が気が合うから (坪井, 1991)、日本の慣習、言葉の障壁、関係作りへの抵抗感、興味なし余裕なし、日本人は意見や主張が少ない (横田, 1991)、自分自身の語学力、日本人の関心のなさ、多忙さ (田中, 1995) が阻害要因として挙げられている。一方、日本人学生を対象とする研究では、日本人学生の語学力不足、日本人のソーシャルスキル不足 (田中, 2003) が挙げられている。対人関係形成の阻害要因は相互交流に影響を及ぼしており、日本人の留学生に対するネガティブな知覚が接触欲求や実際の接触を減少させているという結果も示されている (勝谷ら, 2001)。また、留学生と日本人学生の認知のずれに着目した研究もあり、日本人学生は留学生よりも対人関係形成の困難を「語学フォビア」的に自身の語学力不足に帰属する傾向があるが、語学力を理由とする日本人学生の交流への消極的態度は、留学生において日本人学生の無関心などの態度面に帰属される可能性が指摘されている (田中, 2003)。このように、ホストの認知、ゲストの認知、そしてホスト・ゲスト間の認知のずれが対人関係形成の阻害要因となっていると考えられる。しかし、異文化接触の領域では、ホスト側に努力や変容を期待する論調が強いにもかかわらず、ホストの変容を捉える枠組みやモデルの工夫は不十分であることが課題となっている (奥西, 2008)。

多様性に対する抵抗感と集団間の緊張や敵意の軽減という観点からは、ホスト・ゲスト間のトラブル等への対処に注目する必要もあると考えられるが、それに関しては異文化葛藤や異文化間葛藤の分野で研究が行われている。例えば、奥西・田中 (2009) は、留学生チューターなどを通じて留学生と身近な関わりを持つ日本人学生15名を対象に、異文化間葛藤への対応についての面接調査を行っている。その結果、葛藤に向き合い乗り越えていくタイプの学生は全体の40%に満たず、その他は異文化性の問題を明確に意識化しないまま交流を行っており、問題をかわしたり寛容に受け止めて受容するほうが日本では文化的妥当性が高いという解釈もできると論じられている。

以上を踏まえると、ホスト・ゲスト間の交流における双方の認知あるいは認知のずれが阻害要因となり、異文化間葛藤の解決においてはホストにとっての文化的妥当性が高い対処方略を尊重しつつ阻害要因の解消を模索する必要があると考えられる。そこで、本研究では、日本人学生・ベトナム人留学生・ネパール人留学生における交流の阻害要因として、認知のずれに着目する。日本国内のベトナム人留学生とネパール人留学生の人数は増加したが、日本人学生との交流に関する知見はまだ不足している。日本人学生とベトナム人留学生およびネパール人留学生の対人関係についての認知を比較検討することで、互いの相違点と共通点が明らかになり、実践において介入すべき点や介入方法を検討するための資料が得られると考えられる。また、本研究では日本人の文化的妥当性が高い対処方略と思われる寛容に着目する。奥西・田中（2009）による留学生と身近な関わりを持つ学生への調査では、留学生の異文化性を意識せずに寛容に受け入れている者が多かったが、キャンパスの多様性に対する抵抗感を捉えるためには、留学生との関わりが少ない日本人学生も含めた調査を行う必要があると考えられる。また、偏見・差別・ハラスメントなど（Thomas & Plaut, 2008）の不寛容な態度が生じたとすれば、その被害を受ける留学生にとっても寛容でいられない事態であろう。そこで、まずは日本人学生と留学生が互いに寛容でいられない事態を経験しているかを把握する必要があると考えられる。

### 3. 目的

以上より、本研究は日本人学生とベトナム人留学生およびネパール人留学生の交流における認知のずれを検討することを目的とする。また、集団間の不寛容な事態についても分析する。

## II 方法

### 1. 調査時期

2019年12月と2020年1月に調査を実施した。

### 2. 調査対象

授業時間を利用してA大学に在籍する日本人学生117名、留学生262名に質問紙を配布した。回答に不備のある者を除くと、日本人学生は62名（男性43名、女性19名、平均年齢19.11歳、標準偏差1.42）の回答が得られ、回収率は53.0%であった。ベトナム人留学生とネパール人留学生は計107名の回答が得られ、回収率は40.8%であった。その内訳は、ベトナム人留学生45名（男性24名、女性20名、不明1名、平均年齢22.96歳、標準偏差2.74）、ネパール人留学生62名（男性40名、女性21名、不明1名、平均年齢23.66歳、標準偏差2.09）であった。なお、A大学は私立文系の大学であり、大規模な留学生受け入れを行っている。2019年度は在籍者数2,506名のうち、日本人学生1,083名、留学生1,423名で

あり、在籍者数の56.8%を留学生が占めていた。留学生の出身国はアジア圏を中心とする21か国であり、ベトナム人は558名、ネパール人は614名であった。一部の学科を除いて教育言語は日本語であり、調査対象者は日本語で行われる授業の受講生であった。

### 3. 調査内容

異文化交流に関するアンケートとして質問紙調査を実施した。日本人学生用と留学生用の2種類の調査票を作成した。どちらとも共通するフェイス項目として、年齢、学年、性別を尋ねた。日本人学生に対しては、(1) 留学生と仲よくするのは無理だと思うかどうか及びその理由と、(2) 留学生に対してゆるせないと思ったことがあるかどうか及びその理由を尋ね、自由記述による回答を求めた。留学生用では、日本人学生用において“留学生”と書かれていた箇所を“日本人学生”に変更した。留学生用の質問票も日本語で記載されたが、回答者の項目理解の困難さに配慮して文中の漢字すべてにルビをふった。

### 4. 倫理的配慮

質問票の表紙に、回答は任意であり回答を中断しても構わないこと、回答内容は統計的に処理されるためプライバシーは保護されること、質問紙調査と学業成績の評価とは無関係であることを明記した。

### 5. 分析方法

調査内容(1)(2)の自由記述について、KJ法を用いて国籍ごとに自由記述を分類した後、比較検討のため図解化した。データの分析は臨床心理士と公認心理師の有資格者2名によって行われた。

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 日本人学生と留学生の交流についての認知に関する比較検討

調査内容(1)についての分析結果を表1、表2、表3、図1に示す。なお、本文中では大カテゴリー名を<>、小カテゴリーを【】、記述例は“”の記号を用いて記述する。

表1 日本人学生が留学生と仲良くするのは無理だ（無理ではない）と思う理由

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
<留学生との交流による ポジティブ経験>	【交流から得た ポジティブイメージ】	“とても明るく接してくれて、みんな優しかった”	11
	【交流経験による自信】	“なかよくとまではいかないが話すぐらいまでならできると感じたときがあったから”	4
<異文化の受け入れられなさ>	【性格の違い】	“テンションに追いつけない。話が合わない”	3
	【価値観の違い】	“価値観の違い”	2
	【言語の違い】	“言語の違いで意思疎通が難しそう”	2
	【ルールやマナーの 認識不足】	“トイレに行った後、手を洗っていない”	2
	【留学生の集団】	“集団で固まっている”	1
<留学生を受け入れたい 気持ち>	【偏見の無さ】	“生まれ育つ場所が違うとはいえ同じ人間なのでちゃんと話せば分かり合えると思います”	6
	【留学生に対する 積極的関心】	“話す言語は違うけどなかよくしたい”	2
<気が合うことが条件>	【共有できることがあれば受け入れ可能】	“うまくコミュニケーションをとれば仲良くなれると思います”	4
	【関わる相手の選択】	“留学生というくりじゃなくて、一人一人見れば仲良くできる人もいるし、無理な人もいる”	2
<留学生との交流による ネガティブ経験>	【交流経験による 自信喪失】	“性格上、自由に行動することがあり、グループをまとめるのが大変だったときにそう思った”	3
	【関わりの少なさ】	“かかわりが少ない”	1
<個人の要因による回避>	【無関心】	“興味ない”	1
	【コミュニケーションの 苦手さ】	“留学生とかそういういぜんに自身がコミュ障だから”	1

(筆者作成)

表2 ベトナム人留学生が日本人学生と仲良くするのは無理だ（無理ではない）と思う理由

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
<日本語での会話ができる ことが条件>	【日本語に対する自信の 無さ】	“日本語が上手じゃない。日本語がまだ話せないと思います”	8
	【日本語能力次第で仲良 くできるという認識】	“日本語が上手になって、しゃべられたらできます”	4
	【文化の違いによる関係 構築の困難】	“ことばはあまりわからないし、趣味もちがいます”	2
<日本人学生との交流による ネガティブ経験>	【日本人学生との関わり の無さ】	“勉強とき、留学生と日本人でべつべつにすわったから。話したことがないので、無理だと思ったです”	4
	【日本人学生に話しかけ ることの難しさ】	“日本人と話しかけるのはちょっとむずかしいと思う”	2
<日本人学生との交流による ポジティブ経験>	【日本人学生との交流経 験による自信】	“クラスの中によく日本人の学生のとりに座ってよく話しましたし、学校の活動があるときも一緒に活躍しました”	2
	【日本人学生へのポジ ティブイメージ】	“日本人の学生が本当に親切だし、やさしいと思います”	2
<日本人学生に近づきたい 気持ち>	【偏見の無さ】	“人と人はびょうどうですから”	2
	【話せば仲良くなれると いう認識】	“よく話したら、友達になると思います”	2

(筆者作成)

表3 ネパール人留学生が日本人学生と仲良くするのは無理だ（無理ではない）と思う理由

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
<日本語での会話ができることが条件>	【日本語に対する自信の無さ】	“日本語ちゃんとしゃべることができない”	7
	【日本語に対する自信】	“自分で日本語をしゃべることができると思うだから”	4
<日本人学生との交流によるポジティブ経験>	【日本人学生へのポジティブイメージ】	“日本人の学生は自分たちにやさしいです”	6
	【日本人学生との交流経験による自信】	“日本人といっしょに勉強しているのになかよくするのは無理だと思っていない”	5
<日本人学生の受容的態度が条件>	【日本人学生からの被拒絶感】	“何か留学生見たら嫌がっていると思う。何も話をしないほうがいいと思われると思う”	10
	【日本人学生の受け入れ方次第】	“心がやさしい人にはもちろんなかよくなれますが、心がわがままな人とはできませんと思う”	5
<日本人学生に近づきたい気持ち>	【仲良くなれる自信】	“私たちが日本人と話せば友達になります”	6
	【親和欲求】	“いろいろな国の学生たちの文化、食べ物知りたいので一緒になかよくしたいですから無理だと思ったことがないです”	2

(筆者作成)



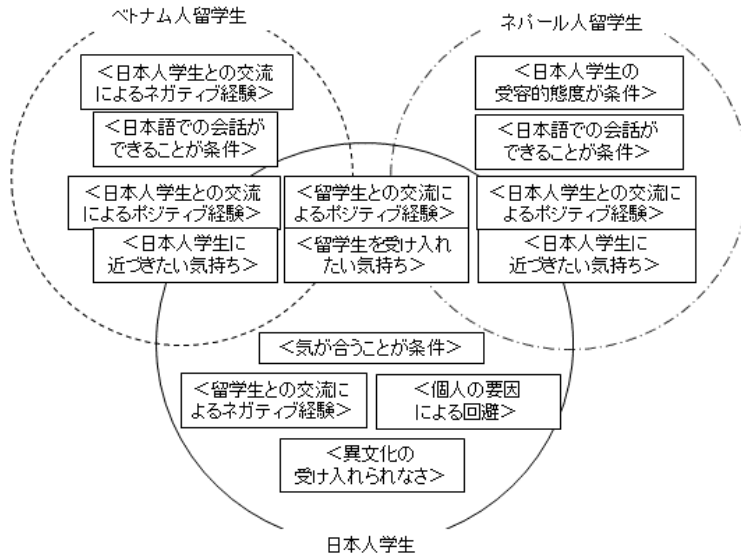


図1. 留学生（日本人学生）と仲よくするのは無理（無理ではない）と思う理由の比較（筆者作成）

まず、日本人学生の分析結果について考察する。日本人学生においては、<異文化の受け入れられなさ>があり、留学生の行動面から性格等の内面に至るまで様々な文化の違いを感じており、それが交流の阻害要因の一つになっていると考えられる。奥西・田中（2009）では、留学生と身近な関わりを持つ日本人学生が異文化性の問題を明確に意識しないまま交流を行っているという結果が示されていた。したがって、留学生との相互交流を経験することで異文化性が気にならなくなっていくのかもしれない。また、小カテゴリーの【言語の違い】から、先行研究（田中，2003）と同様に、交流における困難さを日本人学生が自身の語学力不足に帰属する傾向が確認されたが、その回答例は2つのみであり少数であった。本研究の調査対象校では、語学力よりも行動面や性格面での違いが大きな要素になっていると考えられた。また、日本人学生においてのみ、<個人の要因による回避>という大カテゴリーが得られ、その小カテゴリーは【無関心】と【コミュニケーションの苦手さ】であった。近年、日本人学生の「内向き志向」が問題視されている。「内向き志向」とは、狭義には「内向性」を意味しており、内向的な日本人学生は外向的な日本人学生よりも、「留学生と交流する時間がない」、「留学生との文化の違いに不安がある」、「留学生とかかわることに不安がある」という項目の得点が有意に高いという調査結果が出ており、不安に寄り添う必要性が論じられている（小島ら，2015）。本研究においても交流に無関心な者やコミュニケーションに不安がある日本人学生がいることが示されたため、留学生との交流を促進するには、そのような日本人学生たちに配慮する必要があると考えられる。

次に、日本人学生と留学生の結果を比較しつつ両者の相違点について考察する。対人関係を形成す



るための条件に関しては、日本人学生と留学生とで大きな相違があった。日本人学生は、〈気が合うことが条件〉と考えており、留学生との関わりを持ちたいが、自分との共通点や親密になれる相手かどうかを基に関係を築くか判断したいと考えている。一方、ベトナム人留学生とネパール人留学生においては、〈日本語での会話ができることが条件〉であり、留学生自身が日本語で十分なコミュニケーションを取ることができるかどうかが問題となっている。留学生が日本語能力に对人関係形成の困難を帰属することは先行研究（坪井，1991；横田，1991；田中，1995）と一致していた。しかし、日本人学生については、田中（2003）とは異なり、語学力が条件として独立して抽出されなかった。田中（2003）の調査では、語学力を問う質問項目において、言語の例として英語が挙げられており、日本で教科教育を中心に英語学習が行われていることの弊害が論じられていた。しかし、本研究では、英語を含めた自身の外国語能力がさほど意識されず、語学力に関する記述が少なくなったのではないかと考えられる。また、本研究の調査対象校の留学生は主にアジア圏出身であり、留学生にとっても英語は外国語であるため、留学生との交流において英語が必ずしも必要とはされない。そのため、日本人学生に語学力への心配がさほど生じなかったのかもしれない。また、ホスト国側の日本人学生がゲスト国の言語が理解できないことで心配を抱くことはあまり無いとも推察され、留学生の言語面への全般的な関心の薄さが反映された結果であるかもしれない。ネパール人留学生においては、〈日本人学生の受容的態度が条件〉という大カテゴリーも得られた。その小カテゴリーは【日本人学生からの被拒絶感】と【日本人学生の受け入れ方次第】であり、留学生は对人関係の困難を日本人の無関心や否定的感情に帰属する傾向と一致する（田中，1995）。日本人学生は〈異文化の受け入れられなさ〉や〈個人的要因による回避〉などによって留学生との交流に困難さを感じているが、ネパール人留学生はそのことを認識できていないため、日本人学生から理由もなく避けられ、拒絶されていると認知しているのではないだろうか。したがって、日本人学生が感じている〈異文化の受け入れられなさ〉について、ネパール人留学生と共有することができれば、誤解が解け、互いに近づくことができるのではないかと考えられる。

それから、日本人学生と留学生の共通点も見いだされた。日本人学生における〈留学生との交流によるポジティブ経験〉と、ベトナム人留学生とネパール人留学生における〈日本人学生との交流によるポジティブ経験〉は記述例の内容が類似していた。また、日本人学生における〈留学生を受け入れたい気持ち〉と、ベトナム人留学生とネパール人留学生における〈日本人学生に近づきたい気持ち〉も記述例の内容が類似していた。それらの結果から、日本人学生と留学生の双方が交流への意欲を持ち、実際の交流によりポジティブな経験を積むことができれば、对人関係の形成は促進される可能性があると考えられる。その一方で、日本人学生においては〈留学生との交流によるネガティブ経験〉、ベトナム人留学生においては〈日本人学生との交流によるネガティブ経験〉が見出された。ホストとゲストの相互交流が多いほど、好意的態度が形成され、適応もよいとみる「修正接触仮説」（Kleinburg & Hull, 1979）から、相互交流を促進することで好意的態度が形成される可能性がある。しかし、本研究の結果を踏まえると、相互交流によって生じるネガティブ経験に対処する必要がある。異文化交流においては、失敗から学ぶことも重要だと考えられるため、日本人学生と留学生の双方が交流によるネガティブ経験を振り返り、互いに理解する努力を行う必要があると考えられる。

## 2. 日本人学生と留学生の間に生じる不寛容な事態についての比較検討

次に、調査内容（2）についての分析結果を表4、表5、表6、図2に示す。

表4 日本人学生が留学生に対してゆるせないと思った（思わなかった）理由

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
<講義中の迷惑行為>	【声のうるささ】	“ 授業中うるさすぎる ”	7
	【講義のルール違反】	“ 出席を取る時間のために授業に来る ”	5
	【講義中の攻撃的な行動】	“ 講義中にかんしゃくを起こしてにらみつけられた ”	1
<講義外の迷惑行為>	【マナー・ルール違反】	“ 日本人として常識的なマナーが留学生に対して通じない ”	4
	【列への割り込み】	“ 並んでいる時に、割り込みが多い ”	4
	【唾を吐くこと】	“ どこにでも唾を吐く ”	2
	【攻撃的な行動】	“ けんかをふつうにすること ”	1
<ゆるすための努力>	【理解を示し受け入れること】	“ 授業中に少しうるさいが、にぎやかだし、留学生がうるさいのはしょうがない ”	3
	【関わる相手の選択】	“ 以前はよく苛立ちを感じていたが、質の良い留学生だけと関わるようにしたら自然と気が楽になった ”	1

(筆者作成)

表5 ベトナム人留学生が日本人学生に対してゆるせないと思った（思わなかった）理由

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
<日本人学生へのポジティブイメージ>	【日本人学生へのポジティブイメージ】	“ 日本人がやさしいから ”	5
<日本人学生からの被差別感>	【日本人学生からの被差別感】	“ 外国人に対して、差別する人が多い ”	2

(筆者作成)

表6 ネパール人留学生が日本人学生に対してゆるせないと思った(思わなかった)理由

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
<日本人学生の学習態度>	【日本人学生の怠学】	“日本人が勉強とちゅうでやめることがゆるせないです”	5
<日本人学生へのポジティブイメージ>	【日本人学生へのポジティブイメージ】	“なんでというのは日本人でもよく話し合うので、日本人はみんなやさしいのでゆるせないと思ったことはありません”	5
<対人関係についての楽観性>	【謝れば許すことができる】	“まちがったときあやまったら大丈夫と思います”	4
<日本人学生の迷惑行為>	【日本人学生の酔っ払いのうるささ】	“週末とか月末の時のんべんたちは道にうるさくして他の人にめいわくかける人がいるのでそれはいやです”	1

(筆者作成)

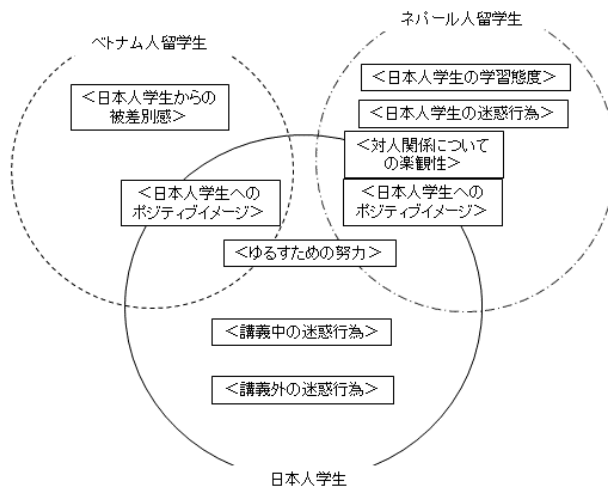


図2 留学生(日本人学生)に対してゆるせないと思う理由の比較(筆者作成)

日本人学生は、留学生による<講義中の迷惑行為>と<講義外の迷惑行為>をゆるせないと思っていることが示された。日本人学生が留学生の特定の言動に対して迷惑さを感じる背景には、日本人学生側の文化差への無理解、留学生の生活事情についての知識不足、特定の言動についての過度な一般化、があると考えられる。例えば、<講義中の迷惑行為>の【声のうるささ】に関しては、留学生は日本人学生よりも積極的に授業中に発言しており、それに対して声大きいと日本人学生は感じているのだと推察される。学生の受講態度は高コンテキスト社会か低コンテキスト社会かという文化の影響を受けており、高コンテキスト社会では「察し」にまかせる部分が多いため授業中の質問がはばかられるが、低コンテキスト社会でははっきりと伝えることが重要であるため授業中に質問や意見を述べることが重視される（中村，2014）。高コンテキスト社会の日本で育った日本人学生にとっては授業中に質問や発言をしないことが普通であるため、授業中に大きな声で発言や質問をする留学生のことを理解できず、迷惑行為だと考えてしまうのではないだろうか。【講義のルール違反】については、講義に意図的に遅刻するなどの行為が含まれていた。ベトナム人留学生とネパール人留学生は、母国の経済難などから、日本で働きながら学ぶために留学する者も多く、アルバイトと学業を両立できずに十分な就学ができないことや、日本語修得の困難が生じることが懸念されている（佐藤，2012；佐藤・堀江，2015）。おそらく、【講義のルール違反】をしてしまう留学生は日本語能力の不足やアルバイトの多忙さにより授業についていけなくなっており、単位取得のためにやむなく【講義のルール違反】をしてしまっているのだろう。しかし、日本人学生はそうした留学生の生活事情をよく知らないため、ルール違反の事実を問題視し、留学生に対して寛容でいられなくなるのだと考えられる。【講義中の攻撃的な言動】に関しては、実際にらみつけられた学生にとっては、たしかにゆるせない言動であろう。しかし、全ての留学生がそのような言動を行うわけではないため、少数の事実を過度に一般化して認識してしまっている可能性が考えられる。以上のように、日本人学生に認知された<講義中の迷惑行為>や<講義外の迷惑行為>の背景には様々な要因が関与しているにも関わらず、日本人学生はそれらを理解していない可能性があるため、日本人学生は留学生の言動の背景を知ることが必要だと考えられる。

留学生も日本人学生に対してゆるせないと思う場合がある。ベトナム人留学生は<日本人学生からの被差別感>を感じており、ネパール人留学生は<日本人学生の学習態度>と<日本人学生の迷惑行為>をゆるせないと思っていることが示された。<日本人学生からの被差別感>に関しては、記述例からは日本人学生のどのような言動を差別的に感じたのかが不明であるが、実際に一部の留学生が学内での差別を経験していることが示唆される。本研究では、日本人学生が留学生の異文化性についての認識不足等から交流の困難さや迷惑行為を認知していることが推察されたため、そうした日本人学生の認知が留学生に知覚されることで被差別感を生じさせているものと予想される。<日本人学生の学習態度>に関しては、苦勞しながら就学を続けているネパール人留学生にとっては大学を中退する日本人学生側の事情がよく理解できず、困難があっても卒業まで就学を続けるべきだという考えから、日本人学生の中退退学をゆるせないのではないかと考えられる。<日本人学生の迷惑行為>については、日本の飲酒文化が関連していると考えられる。日本には「飲むことと酔うことに寛大な文化」があり、人が集まる行事にしばしば酒が供され、集団的同調性の高さから「共に飲む」ことが仲間であ

ることを確認するセレモニーであることが多い(中本, 2009)。また、酔った上で失態を犯したとしても、それまでの社会的属性や飲酒時以外のふるまいがある程度維持されていれば許容されるといった飲酒規範があり、飲酒に対する「過寛容 (over-permission)」な文化が維持されているという指摘もある(心光, 2007)。留学生がそのような日本の飲酒文化を知らなかった場合、日本人学生が酒に酔い公共の場で騒ぐことは理解できず、不快に感じるであろう。日本人学生が自身の飲酒マナーを省みて改善すると共に、留学生が日本人学生側の生活事情や日本文化を理解することも必要だと考えられる。

以上のように、日本人学生と留学生の双方が不寛容な事態を経験していたが、不寛容な事態があったとしても相手集団を受け入れようとする態度を有している者もいた。日本人学生においては、<ゆるすための努力>として、留学生のうるささを“にぎやか”とリフレーミングするなどして【理解を示し受け入れること】や、留学生を一括りにせず、個人を理解した上で付き合うという【関わる相手の選択】が行われていた。一方、留学生においては、<日本人学生へのポジティブイメージ>を維持する者や、<対人関係への楽観性>を有しており、不寛容な事態があったとしても関係を修復することができる考える者がいた。記述例が少数であるため一般化は困難だが、不寛容な事態に対して、日本人学生は自身の認知と行動を変容することで自身のネガティブ感情を減少させる方略を取る一方で、留学生は自身のポジティブ感情の維持や対人関係を修復する方略を取るという違いがあるのではないかと考えられる。不寛容な事態への対処方略が異なることで、互いの関わり在意図が誤解され、さらに認知のずれが生じることも予想されるため、まずは不寛容な事態に対する認知や対処方略の違いがあることへの理解が必要だと考えられる。

### 3. まとめと今後の課題

本研究は、日本人学生と留学生の交流における認知のずれを検討することを目的とした。質問紙調査の結果から、①日本人学生の<異文化の受け入れられなさ>や<個人の要因による回避>が留学生との交流を阻害していること、②留学生は日本語能力不足による困難さを感じているが、日本人学生は自身の語学力不足をさほど問題視していないこと、③交流を通じたポジティブな経験や交流意欲があれば、相互交流が促進される可能性があること、④不寛容な事態は、相手集団の生活事情や文化差への理解不足や少数の事実を過度に一般化していることに起因する可能性があること、⑤まずは不寛容な事態に対する認知と対処方略の違いを理解する必要性があること、の5点が示唆された。

以上のように、本研究では、日本人学生と留学生の双方の視点から、交流における認知の相違点と共通点を明らかにした。結論として、日本人学生と留学生との交流を促進し、友好的関係を構築するためには、交流の困難さや不寛容な事態の背景について学び合うことで認知のずれを小さくしていき、互いに歩み寄る努力を行うことが必要だと考えられる。

今後の課題の1点目は、留学生の大学内での被差別感についてより詳細に検討することである。本研究ではベトナム人留学生の自由記述から、実際に学内での差別を経験している者がいることが示唆されたが、記述量が少ないため具体的な内容は不明であった。留学生の被差別感に関する研究はアルバイト先における差別に着目しているものが散見されるが(黄, 2010; 黄, 2012)、今後は大学内で



の差別にも着目し、インタビュー調査により詳細に明らかにしていく必要があると考えられる。2点目は、本研究で得られた知見を数量的に検証することである。本研究の調査対象校は1校のみであり、仮説生成型の研究であることから、本研究の知見は一般化する上での限界を有していると考えられる。そこで、本研究の結果を基に尺度を作成し、調査対象者を増やした上で質問紙調査を行い、仮説を検証していくことが必要だと考えられる。3点目は、日本人学生と留学生の交流を促進する実践研究を行うことである。わが国では、日本人学生と留学生とが直接交流する中で相互理解を深めることを目的とする「多文化クラス」の実践が報告されている（例えば、高松，2015）。そこで、今後は多文化クラスのような実践を行い、介入前後で認知のずれがどのように変動するかを検証することが必要だと考えられる。

#### 文献一覧

- 岩切朋彦（2017）。「働く留学生」をめぐる諸問題についての考察（1）—グローバルな移民現象としてのネパール人留学生—, 鹿児島女子短期大学紀要, 53, 15-24頁.
- 大西晶子（2016）。「留学生の受け入れとキャンパスにおける多様性対応の推進：米国の取り組みを踏まえた日本の大学における課題の整理」, 留学生教育, 21, 55-62頁.
- 奥西有理・田中共子（2008）。「ホストの異文化接触に関する研究課題の展望—ゲストとの交流と関係性についての実証的研究—」, 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 26, 76-88頁.
- 奥西有理・田中共子（2009）。「多文化環境下における日本人大学生の異文化葛藤への対応—AUC-GS学習モデルに基づく類型の探索—」, 多文化関係学, 6, 53-68頁.
- 勝谷紀子・山本直美・坂元章（2001）。「アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ—女子の大学生に対する実験」, 社会心理学研究, 17（1）, 43-54頁.
- 黄美蘭（2010）。「日本語学校に通う中国人学生の被差別感と原因帰属との関連」, 人間文化創成科学論叢, 13, 59-67頁.
- 黄美蘭（2012）。「アルバイト先における被差別感の原因帰属と解決行動との関連—中国人私費留学生の場合—」, 人間文化創成科学論叢, 15, 73-82頁.
- 小島奈々恵・内野悌司・磯部典子・高田純・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・神人蘭・矢式寿子・吉原正治（2015）。「日本人大学生の国際交流に関する意識調査：「内向き志向」と国際交流意思の関係」, 総合保健科学, 31, 35-42頁.
- 佐藤由利子（2012）。「ネパール人日本留学生の特徴と増加要因の分析—送出し圧力が高い国に対する留学生政策についての示唆—」, 留学生教育, 17, 19-28頁.
- 佐藤由利子・堀江学（2015）。「日本の留学生教育の質保証とシステムの課題—ベトナム人留学生の特徴と送り出し・受け入れ要因の分析から—」, 留学生教育, 12, 93-104頁.
- 心光世津子（2007）。「アルコール依存症者のライフストーリーにみる我が国の飲酒規範」, 保健医療社会学論集, 18（2）, 95-107頁.
- 栖原暁（1996）。「アジア人留学生の壁」, 日本放送出版協会.
- 高松里（2015）。「学部新入生を主な対象とした多文化クラスの展開—受講者は何を学んだのか—」, 九州大学学生相談紀要, 2, 33-47頁.
- 田中共子（1995）。「在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する原因認知」, 学生相談研究, 16（1）, 23-31頁.
- 田中共子（2003）。「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」, 学生相談研究, 24（1）, 41-51頁.
- 坪井健（1991）。「アジアの学生・日本の学生—留学生調査と日本・台湾・韓国の比較調査を通して」, 駒沢社会学研究, 23, 115-144.
- 中村良廣（2014）。「第15章 静かな教室と白熱する教室」, 石丸暁子（編）, 『自発学習型 異文化コミュニケーション入門ワークブック』, 松柏社, 71-74頁.
- 中本新一（2009）。「アルコールに対する社会的コントロールの必要性」, 同志社政策科学研究, 11（2）, 63-71頁.
- 花見慎子（2003）。「日本人学生と留学生との交流—サークル、混在寮、授業をとおして」, 留学交流, 15（8）, 2-5頁.

- 文部科学省ホームページ (2020). 「[外国人留学生在籍状況調査]及び「日本人の海外留学者数」等について」, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm), 2020年9月1日
- 山下清海 (2016). 「増加・多様化する在留外国人 : 「ポスト中国」の新段階の変化に着目して (特集号論文)」, *地理空間*, 9 (3), 259-265頁.
- 横田雅弘 (1991). 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」, *異文化間教育*, 5, 81-97頁.
- Datum, B.D. (1992). Talking about race, learning about racism: The application of racial identity development theory in the classroom. *Harvard Educational Review*, 62(1), pp. 1-24.
- Kleinburg, O., & Hull, W. F. (1979). *At a foreign university: An international study of adaptation and coping*. New York: Praeger.
- Pope, R. L., Reynolds, A. L., & Mueller, J. (2014). *Creating Multicultural Change on Campus*, San Francisco: Josey-Bass.
- Thomas, K. M., & Plaut, V. C. (2008). The many faces of diversity resistance in the work place. In Thomas, K. M. (Ed.), *Diversity resistance in Organizations*, NY: Lawrence Erlbaum Association, pp. 1-22.



